

「パウロの回心」

1. はじめに

*パウロは誰よりも自分の事を話した使徒として知られる。信仰者としての自分と肉のころであった自分との関係においてである。そのパウロの回心の経緯が記される箇所です。

- ①パウロはどんな人か。
- ②復活のイエスに出会った。
- ③異邦人の使徒として遣わされる。

2. 本文

①パウロはどんな人か。9:1～2

- ・1節:さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅かして殺害しようと息巻き、大祭司のところに行って、ダマスコの諸会堂宛ての手紙を求めた。
- ・ピリピ3:5、私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエル民族、ベニヤミン部族出身、ヘブル人の中のヘブル人、律法についてはパリサイ人。

②復活のイエスに出会った。9:3～9

- ・4節「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」
- ・10節～17節:ダマスコにアナニアという弟子がいた。
- *新生したパウロの言葉。
- ・(律法について)それで、いのちに導くはずの戒めが、死に導くものであると分かりました。ローマ7:10
- ・私には自分のしていることが分かりません。自分がしたいと願うことはせずに、むしろ自分が憎んでいることを行っているからです。ローマ7:1
- ・(信仰が与えられたことについて)母の胎にあるときから私を選び出し、恵みをもって召してくださいました。ガラテヤ1:15
- ・(ものの見方について)Ⅱコリント5:16, 17「ですから、私たちは今後、肉にしたがって人を知ろうとはしません。かつては肉にしたがってキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。」

③異邦人の使徒として遣わされる。9:10～22

- ・15,16節:しかし、主はアナニアに言われた。「行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子らの前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のためにどんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示します。」

3. まとめ

*「人は何だろうか」思想家の問いではなくダビデの問いである。詩編8:4ダビデの想いの底には「なぜ主はこんなに愛してくれるのだろうか。」がある。問いの前提は畏敬の念である。パウロも同じ思いがあったと思う。悔い改めて主に立ち返った時「生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださいました方」と語った。